GRAPHIC NOVEL

異種姦 絵物語

王乳マドハンド

PDF体験版

Erotic Fantasy Larvaturs
Fue Takaishi

OVER 18 ONLY

王乳マドハンド

Larvaturs graphic novel

異種姦絵物語 体験版

高石ふう

◇：目次

◇：登場人物

◆序章：呪われた城　……10p

◆ 1：若き女騎士　……12p

◆ 2：不思議な「意思」　……17p

◆ 3：六番牢　……20p

◆ 4：解かれた呪い　……24p

◆ 5：契約　……30p

◆ 6：増していく刺激　……34p

◆ 7：マドハンド　……39p

◆ 8：契約の終了　……42p

◆ 9：塔の調査　……45p

◆ 10：胸を犯され続けるマリーナ　……50

◆ 11：ベッドの中の腕　……59p

◆ 12：発熱　……66p

◆ 13：毒草　……71p

◆ 14：消えた王妃　……76p

◆ 15：追憶の塔　……79p

◆ 16：記憶のかけら　……86p

◆ 17：毒草の巣　……91p

◆ 18：マリーナの最後　……96p

◆ 19：封印　……110p

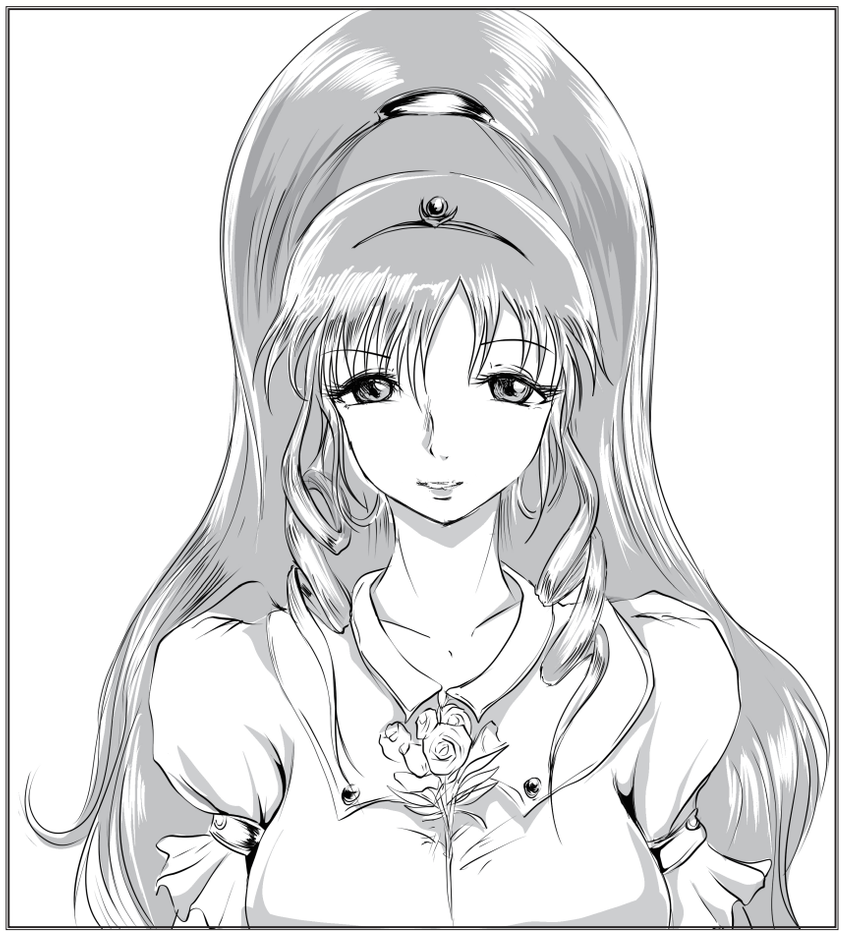
◆ 終章：愛するひと　……112p

◇：あとがき　……118p

◇：世界設定補足　……120p

◇：奥付等

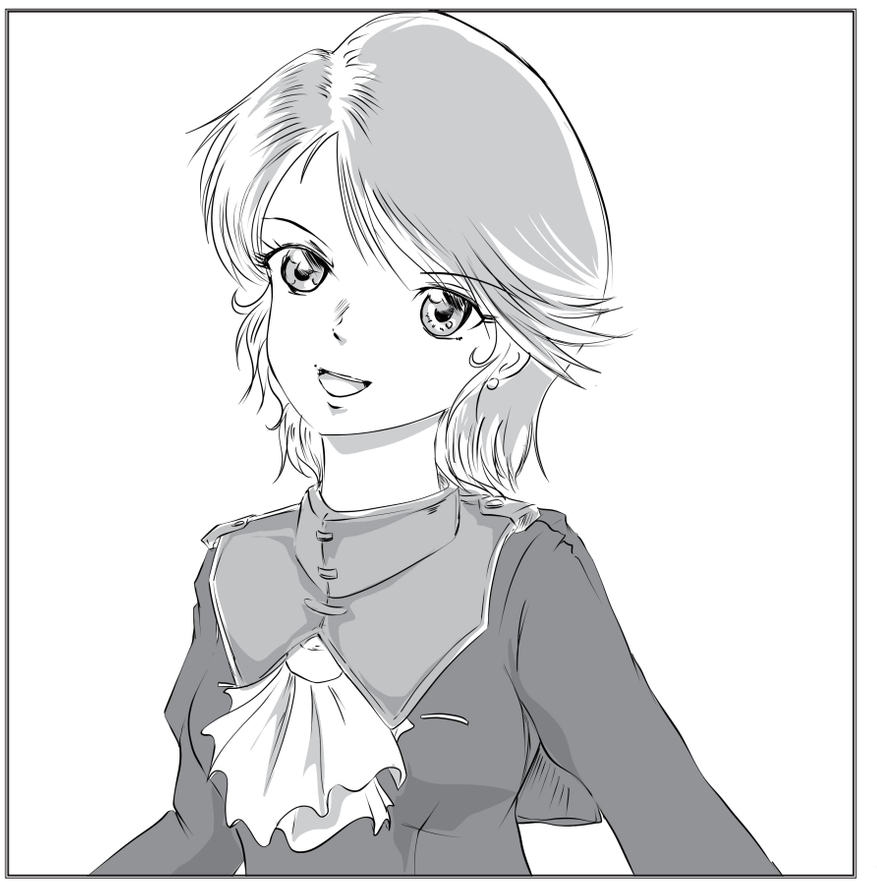
◇　マリーナ王妃



エスタリカ城の城主。国王不在の今、事実上の国の指導者。かつての戦いで、獣人軍から人間たちを解放した勇者たちの一人。もともとは、月の女神「マラウィ」に仕える高位の神官。この人からは、不思議ないい匂いがする。

◇　メイリン

エスタリカ城勤務の衛兵のひとり。側近の近衛隊に属してはいるものの、上には多くの優れた騎士たちがいるので、メイリンの出番はまだそれほど。明るくてハキハキとしゃべる。数字が苦手。

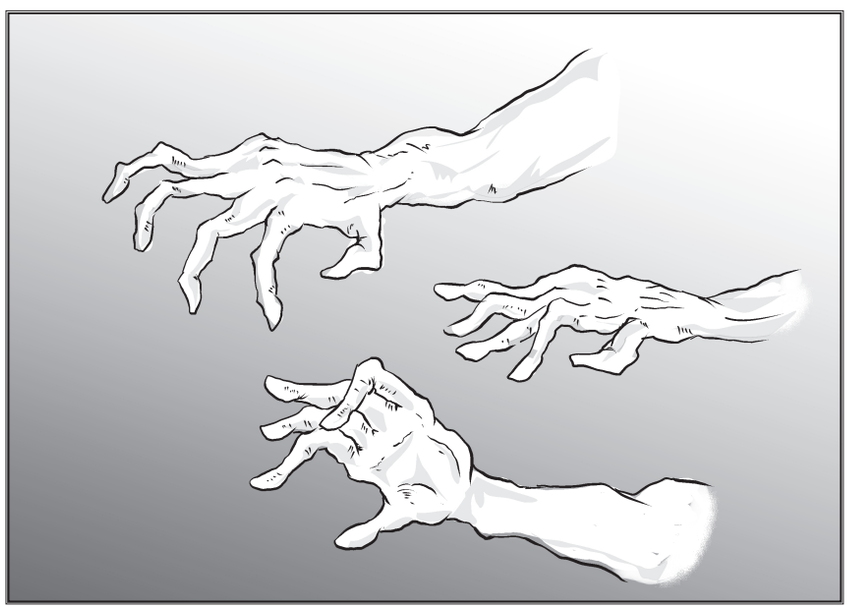


◇　ティオ・ペペとリーゼル

なりは小さいが、国随一の実力を誇るだろうと言われている魔法使い。男性。このティオ・ペペも、かつてマリーナとともに人間たちを救い出した勇者の一人。現在はエスタリカ城の王室魔法院、院長を勤めている。もともと協調性のないタイプだが、最近はいろいろと人間の世話を焼くようになった。リーゼルは、ティオ・ペペの助手をしつつ、王立魔法アカデミーの講師も勤める。おっとりとした優しい女性。

◇　マドハンド

古い時代のモンスター。現在、地上ではあまり見ることはなくなった。ゴツゴツしたその手の表面はパサパサに乾いていて、何かを求めるように地面や壁を這い回っている。



◆序章　：　呪われた城

原因不明の熱病が、エスタリカ城を支配しつつあった。城に従事する者の多くが、高熱を出して倒れてしまったのだ。薬を飲めば一時的に回復するものの、翌朝にはまたすぐに再発し、高熱にうなされる。

幸い、城以外の国民にまではまだ、感染が広がっていなかった。が、このままではそれも時間の問題だ。

この問題で、エスタリカ城主であるマリーナ王妃は自室で頭を悩ませていた。あらゆる手を尽くしたものの、この熱病の原因がまったく解らないのだ。日ごとに倒れていく城の従事者たち。現在すでに、約半分の者が、病床に伏せてしまっている。この原因を取り除かなければ、城の機能は麻痺し、国の運営にも影響が出てしまう。

「……このままでは……いずれ、皆が倒れてしまう……いったい何故……」

マリーナは、熱にうなされる苦しそうな仲間たちの顔を思い浮かべ、辛い気持ちになった。早く治してあげたい、そしてまた前のような、みんなの明るい笑顔がみたい。マリーナは毎晩、神に祈りをささげていた。

不気味なこの熱病は、城の者たちを大いに恐れさせた。そして、これは流行病（はやりやまい）などではなく、きっと、エスタリカ城にかけられたのだ呪いが原因なのでは、という噂がささやかれ始める。中には暇をもらって城から逃げ出す者も出始めたのだ。

「……ああ……このままでは……城も国も……。神よ……私に出来ることは何でもいたします。どうか……みんなを……大事な仲間たちを……この苦しみから救ってください……」

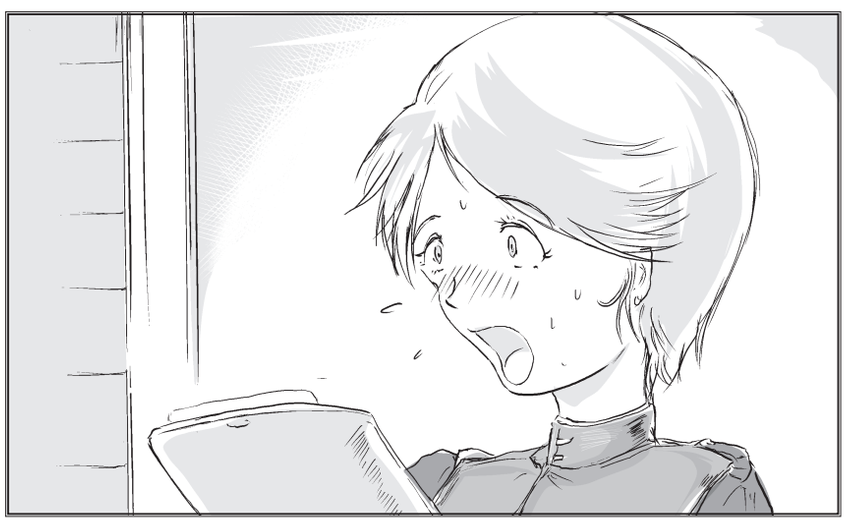
◆：1　若き女騎士

コンコン、と、ドアがノックされた。

「お、王妃様ぁっ！、メ……メイリンですッ！ご、ご！ご、ご指示のご状況のご報告ですッ！。」

極度の緊張からか、声が裏返っている。扉が開いて入ってきたのは、王室直属の近衛騎士隊のひとり、メイリンだった。いつもならば近衛騎士隊長がマリーナに謁見しているのだが、騎士隊長たちもやはり熱病で倒れてしまっていたので、今日から若いメイリンがその代理を務めることになっていた。

メイリンは、開いた扉からほんの少しだけ前に出て直立不動になり、マリーナに対して力いっぱいの敬礼をした。そのあと必死で暗記したご挨拶の口上を述べたが、暗記間違いなのだろうか、意味は不明だった。でも、マリーナは笑いだしたりせず、いつもの静かな微笑をうかべたまま、本題であるメイリンの報告を聞いていた。城の熱病の現状報告だった。



報告の途中、マリーナがメイリンに、もう少し中にお入りなさいと言ったとき、メイリンは自分が立ち位置を間違えていることに気がつき、顔を真っ赤にし、半歩ほど前に出たが、ほとんど場所が変わっていなかったのでマリーナは、もう少しこちらへ、と繰り返すと今度はメイリンは耳まで真っ赤になって、合計いっぽと少しだけ、部屋の中へ進むことができた。

そうして侍女たちはようやく部屋の扉を閉めることができたのだが、こんどは、マリーナと部屋に二人きりになってしまったという事実が、メイリンをさらに焦らせ、結果的にマリーナは、最初のご挨拶口上からもう一度報告を聞かされる羽目になった。

熱病の現状は、マリーナが予想していたとおり、好ましいものではなかった。最初は、城の地下にある食料庫やワインセラーで仕事をする者に発症していたが、いまやその発症場所は地下だけに限定されていない。患者に接触していない者も発病することから、この城の中のさまざまなところに、熱病の原因があるとしか考えられない。

元老院の意見では、先日にあった大きめの地震で、壁や岩組みの間に発生したカビや菌などが舞い上がったのだろうと言うことだったが、その地震も一週間以上前のことなので、もう沈静化しても良いはずであり、その真偽は疑わしい。引き続き、さまざまな院が調査が続けているが、決定的な原因はどうしても不明のままだった。

メイリンは懸命に、レポートを読み終え、再度直立となった。マリーナの指示を待つ。不慣れな任務だ。メイリンの顔や首もとには、汗が噴出している。しかしなぜか、やりきった感の満足げな表情も浮かんでいた。

だが、マリーナの表情は対照的に暗かった。もちろん、この現状を憂いているのだ。メイリンはようやくそれに気づき、神妙な顔つきになった。察して、今度はマリーナが微笑む。

「報告ありがとう、メイリン。どう？あなたは大丈夫？」

「！！！？ぃえっ！！？　はっ！……は！ハイ！！ハイ！私はだ、だ、だ大丈夫ですっ！ナ、ナントカは風邪引かないと申しますし！」

メイリンはマリーナから突然話しかけられ、舞い上がった。そして持ち前の明るさから、すこしおどけて見せた。無意識に、マリーナに笑ってもらいたかったのだろう。マリーナは、そんなメイリンの気持ちを察して、また小さく微笑んだ。メイリンは体中に嬉しさがみなぎるのを感じた。

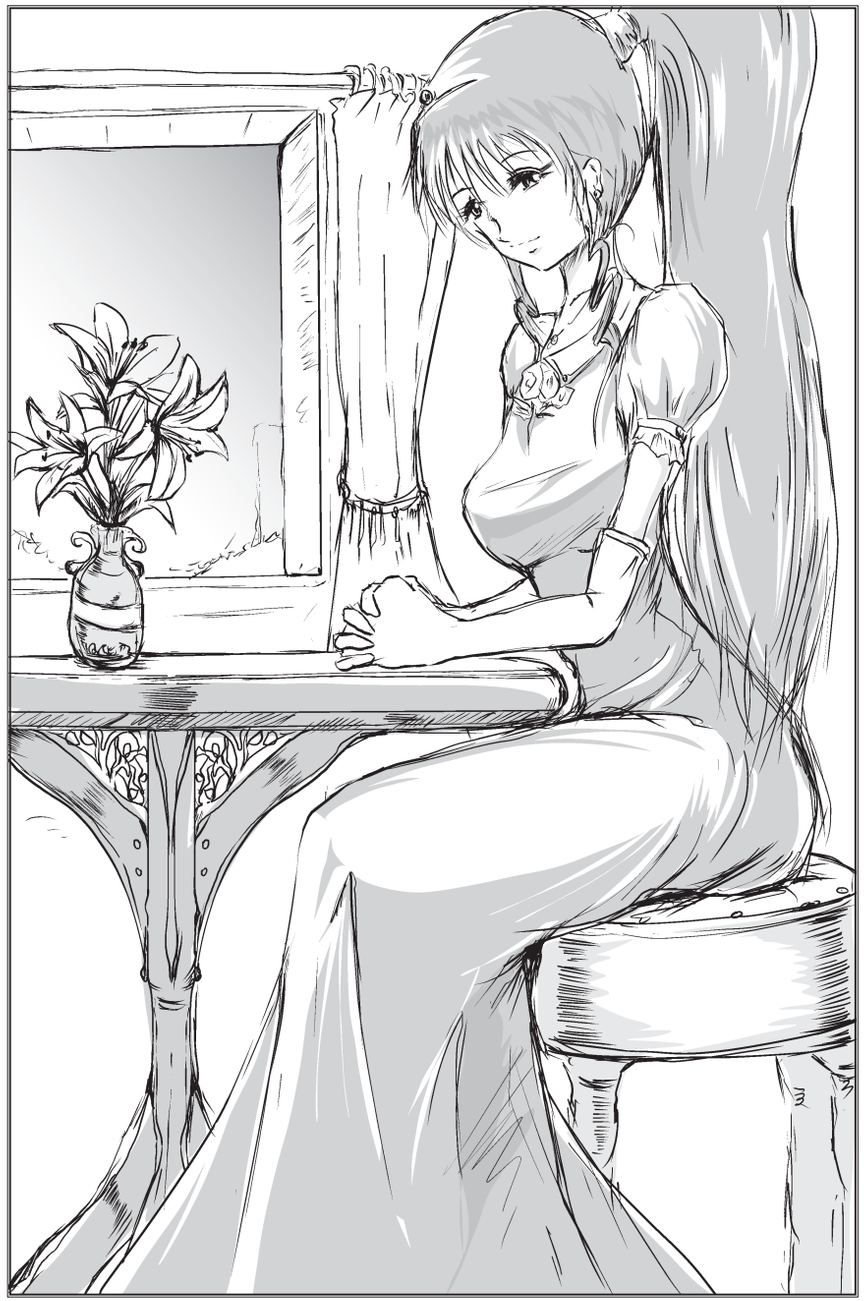
……メイリンがこうなってしまうのは、無理もない。普段は、マリーナと直接話をすることなど、いち騎士隊員の身分のものでは、不可能なのである。それにマリーナは、メイリンだけでなく女騎士たちのすべての憧れなのだ。

見た目の美しさはもちろん、王妃としての気品、そして慈悲深き優しさ。女騎士たちからしたら、すこし年上の憧れの存在でいて、雲の上の女神なのだ。中でも、メイリンは、マリーナのことが大好きで大好きで、しかたがないのだ。

そうそう、今、庶民の間では、有名な冒険者や女騎士の「カード」（写真に装飾を施したもの）が流行している。自分の好きな相手のカードを集めて、それを見ながら毎晩ニヤニヤするのだ。メイリンはマリーナ王妃のカードを数枚持っている。

もちろん、王室のカードは販売禁止なのだが、こういうものは必ず出回るもの。また、マリーナもそのあたりを厳しく取り締まらないので、半ば黙認状態になっている。メイリンは、マリーナのカードがどうしても欲しくて、こっそり街へ買いに行き、法外な値段にも関わらず手に入れた。そして夜毎こっそりと、足をバタつかせながら、カードのマリーナを抱きしめているほどである。

マリーナはメイリンにとって、それほど憧れの存在だったのだ。その女性が、目の前にいて、自分の心配をしてくれる。微笑んでくれている。なんという現



実だろう！熱病がなければ、自分が隊長の代理にならなければ、ありえなかったことだ。メイリンは今、自分が生涯使える運の多くを使用しているのだろうと考えていた。しかし、それが何の問題であろうかと！　他にどこに使うのだと！　メイリンはとても満足し、不謹慎と知りつつも、この上ない幸せを感じてしまっていた。

そのあともマリーナは、メイリンにやさしい微笑と言葉をなげかけ、メイリンは半ば意識と記憶を失いそうになりつつも初めての朝会出席を終え、マリーナの自室をあとにした。両足をそろえたままぴょんぴょんと飛び跳ねながら階段を下りるその姿は、侍女たちにもはっきりと解るほど、嬉しさがにじみ出ていた。

しかし、メイリンが出て行った後、マリーナはさらに浮かない表情になるしかなかった。やはり日ごとに、着々と、現状は悪くなっている。考えられる対応策はすべて試したのに、何の効果もないのだ。

それでも、何もしないわけにはいかない。マリーナはその後もずっと、王室の魔法院長達も交え、更なる対策ができないかと悩み続ける時間が続いた。そしてそれは次の日も、その次の日も、苦悩の日々は続く。「エスタリカ城」の呪いは、一向に解けなかった。

そんな中、毎朝、見せてくれるメイリンの笑顔は、どれだけかマリーナの救いになっていた。

◆２：　不思議な「意思」

マリーナは今日も一日中悩み続ける時間をすごし、ようやく疲れた体を、ベッドに横たえていた。もうずっと、何日も、眠れない夜が続いている。目を閉じれば、高熱にあえぐ者たちの顔が浮かんでしまうのだ。マリーナはさまざまな考えをめぐらすが、やはりどれもこれも、効きそうにない。唯一の救いが一時的に症状が治まる薬だが、それとて強い薬のため、飲み続ければ体に良いはずはない。

幸い、マリーナ自身は熱病に冒されてはいなかったが、熱病のことが彼女の頭から離れることはなかった。気丈にふるまってはいたものの、マリーナの疲労は相当なものだろう。眠らなくては、体力が回復しない。マリーナは無理やり目を閉じて、眠ろうとする。

この「呪い」、つまり熱病の流行が始まってから、９日めの夜のこと。目を閉じていたマリーナは、自分の近くに、不思議な気配を感じた。なにかが、誰かが、この部屋にいる、そんな気がした。浅い眠りをさまよっていたマリーナは、横になった体制のまま、体中の神経を一気にはりつめさせた。自分の意識を部屋の空間にひろげていく。

しばらくたっても、その気配は消えなかった。そのままでマリーナは目を開けた。新月の夜は、月の光がない。ベッドからゆっくり上半身を起こし、マリーナは灯りをともさないまま、その気配の正体を探っていた。

……声……？言葉……？

違う、マリーナのなかに直接響くような「意思」があった。言葉というより、心の奥、お腹のあたりだろうか、「こうしたい」という、何者かの強い意志を感じた。

マリーナはもともと、高位の神官である。カタチならぬ者に対するシンクロ力は非常に強い。また、月の女神に使えるその身は、不浄な者に対する感覚は人一倍だ。しかしこの気配に邪気は感じなかった。邪気どころか、どこか懐かしいような、親しみのある、不思議な気配だった。

マリーナは心を落ち着け、その意思に神経を集中した。

「……えっ？……地下？……六番牢……？」

気を抜けば流してしまいそうなほどのかすかな意思を、マリーナは感じ取った。地下といえば、最初に熱病が発症した場所である。マリーナは、熱病に関することなら何でも情報を仕入れたかったので、このささやきに興味を持ったずにはいられなかった。

しかし、今、この城に「六番牢」と言うものは存在しない。連邦制がしかれ、国同士の戦いがなくなった今、城内に牢を設ける必要がなくなったのだ。かつて、牢があったことを知るものも少ない。

……だが、マリーナはこの「六番牢」の意味する場所を知っていた。この城はマリーナが生まれ、育った場所だからだ。今の気品あふれる姿からは想像もできないほどおてんばだった幼少期のマリーナは、この城の周りは所かまわず冒険したから。

現在は武器保管庫となっている、地下三階にある一室が、かつて六番牢と呼ばれていた部屋だ。今は、誰も寄り付く者などいない場所。位置的には、この城の最北端で、暗く、寒い場所だ。

「……解ったわ……参ります……」

マリーナは夜着に一枚はおって、その意思の導きに従った。不思議と、自分ひとりでいかなくてはいけないこと、他言してはいけないことを感じて、そのとおりに行動した。熱病が続き、感染者がふえてからは、全員自室で休むように決められており、夜中に城の中を歩くマリーナの姿を見るものはいなかった。

◆３： 六番牢

ひんやりとした暗い場所に、マリーナは一人でいた。３メートル四方程度の小さな牢。中にはいくつか、昔の武器があったが、きちんと整理され保管されていた。

「……参りましたよ……。どこ……どこですか？……誰……？あなたは誰？」

マリーナは声に出してつぶやいた。気配は感じるが、あまりにもわずかで、なかなか意識を寄せていけない。マリーナは、まるで、かつて戦場で仲間と戦いを潜り抜けた頃のように強い集中に入った。

すると、ようやく意識のしっぽを捕まえることができた。かすかなささやきが、マリーナに伝わってくる。

「え？……と……統治者？……王？あなたは……古代の……古代の王？……なのですか？」

その意思はマリーナに服従を求めているようだった。こんなにか弱い存在が、とても横柄な雰囲気で自分に接してくるのが、マリーナにとって不思議であったが、確かに、どこか畏怖も感じた。

途切れ途切れに伝えられる意思。少しでも気を抜くと、チャンネルが変わってしまい、その意志を捉えられなくなる。マリーナはつめたい床にひざをついて、さらに集中を続けた。そしてマリーナにとって、もっとも興味深いメッセージが伝わってくる。

「えっ……の……、のろ……い！？……のろいとは、熱病のこと？……やはりあなたは何かご存知なんですか！？」

少し大きな声をだしてしまい、あわててマリーナは口を押さえる。集中が途切れ、もういちど意志を探すために、目を閉じた。そしてまた、同調に成功する。

「……ええ……、は、はい……、しかし……それは……簡単には信じられません……」

意志はこう伝えた。城に呪いをかけたのは自分だと。そして、呪いを止めて欲しければ、マリーナに服従を命ずる、と。

これほどか弱き存在、自分がこんなに強く集中しなければコンタクトできない、えたいの知れないモノに服従など？とてもじゃないが、笑い話にしかならない。そして、その「服従」の意味するところも、マリーナには、おおよそ理解もできていた。

この意志の求める「服従」、つまり代償は自分のカラダであろう。だが、命までとられるような危険はまったく感じなかったのでマリーナは少し強い言い方をした。意志はマリーナのそんな態度に不服そうだった。

そしてさらには、マリーナのほうが一枚上手だった。すぐさま彼女のほうから交渉をもちかけたのだ。

「わかりました。あなたが強い呪いの力を持っていて、城の皆を熱病にさせたのですね。そして、今度はそれを止めることができるというのなら、あなたの望みを聞いても良いでしょう。しかし、今、契約をお受けすることはできません。まず先に、この熱病を止めてください。今宵、皆は、薬を飲んで休んでいます。明朝、誰一人かけることなく、病状が回復していたのなら、あなたを信じ、契約しましょう。もし誰か一人でも熱病が続いていたのなら、この契約には応じられません」

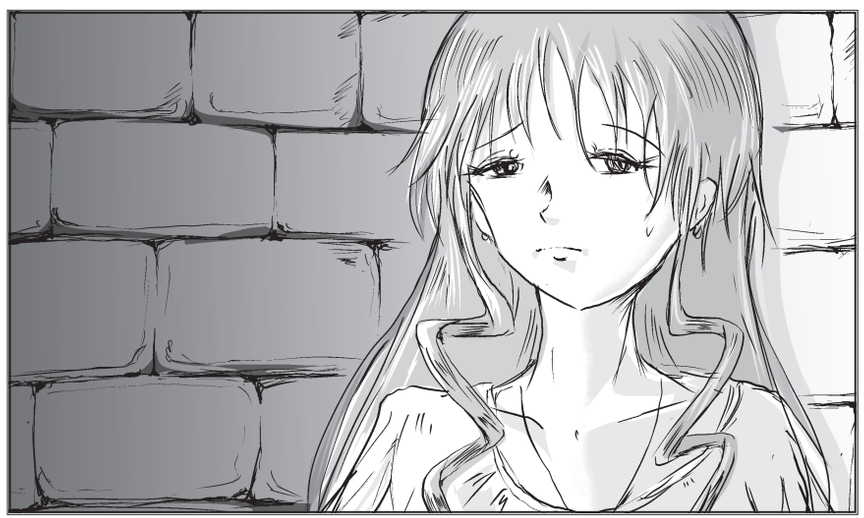
マリーナははっきりとした口調で、気配を感じる壁に向かってそう伝えた。

そして引き続き、その返事を聞くために、マリーナは意識を集中した。

「……ええ……はい……そうですか……解りました。良いでしょう。もし、明日、皆が回復していたら再びこの時間、この場所に、私は参ります。そこで必ず契約をお受けしましょう」

そしてすぐ、静寂がおとずれた。気配がまったくなくなる。そのあともマリーナはしばらくこの六番牢にいたが、もう、この不思議な意志を感じとれなかった。

…… 体験版は以上で終了です ……

PDF は正常に読めましたでしょうか。
作品版には画像版（960/673）も同梱してありますので
お好きなほうでお楽しみいただけます。

ラーバタスのエロティックファンタジー物語
是非、お楽しみください。